様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：４３４０５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５９３３６２

研究課題名（和文）検査・処置を受ける幼児後期の子どもの調整能力発揮への支援プログラム開発と効果測定

研究課題名（英文）Development and evaluation of a program for supporting self-regulation in preschool children undergoing medical care

研究代表者
吉田　美幸（Yoshida, Miyuki）

福井医療短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：５０４６５８４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、検査・処置を受ける幼児後期の子どもの調整能力発揮への支援プログラムを開発し、その効果を明らかにすることを目的とした。文献検討および、医療処置のなかでも点滴・採血を受ける幼児後期の子どもの自己調整機能とその発揮に向けた関わりに対する看護師への面接調査結果を基にプログラムを作成した。プログラム研修を看護師に実施し、研修前後の看護師のケア実践について調査した。その結果、研修後の看護師は、幼児後期の子どもの自己調整機能の発揮に向けた意図的な観察や実践をし、子どもと共にケアを探求する姿勢へと変化していく一方、多忙な中でのプログラム活用方法への検討の必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a program for supporting self-regulation in preschool children undergoing medical care, and to determine the program’s effectiveness. The program was created based on a literature review and interviews with nurses involved in nursing preschool children undergoing venipuncture as part of their medical care. Nurses received training in the program and were interviewed regarding the care administered before and after their training. The results suggested that after receiving training, the nurses deliberately observed and implemented procedures focused on the promotion and the adoption of self-regulatory behaviors and emotions in preschool children, and administered nursing care in collaboration with the children. Further, the findings also indicated a need to consider how to implement the program in nurses’ demanding schedules.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：検査・処置　幼児後期の子ども　自己調整能力　支援プログラム　看護師の実践

１．研究開始当初の背景

子どもにとって、医療の場で行われる検査や処置は、非日常的な体験ではあるが、このような場においても子どもが持てる力を発揮できるように環境を整えていくことは重要である。

しかし、幼児後期の子どもは、親や医療者の多くから説明を理解する力はないと思われ、また、説明がされていても発達に合わせたものではなく、身体的な苦痛に加え、認知発達的特徴から、見通しをもてないまま、不安を抱きながら検査や処置を受けている（鈴木, 2000；飯村, 筒井, 込山他, 2000；勝田, 片田, 蛯名他, 2000）。さらに、医療者は、子どものこれまでの生活体験を理解していないため、彼らの気持ちや要求を察することが困難である。そのため、子どもは、自分の思いが取り残された形で検査・処置が進められてしまう可能性がある。

このようななか、小児看護において、子ども自身が主体的に医療に参加できるために、子どもの発達に合わせたケアを保障することの必要性が謳われている。そして、現在、検査や処置を受ける子どもの対処能力を引き出し、自己肯定感を高めるプレパレーションへの関心が次第に高まり、その効果について報告されるようになった。しかし、それらの多くは、視覚的ツールや医療物品を用いた具体的な説明に主眼を置くものであり、幼児後期に芽ばえる自己の行動、感情、心身の状態などを自律的に統制・調整する自己調整機能に視点を向け、その力を支え発揮できるような幼児後期の発達の内実に踏み込んだ研究はほとんどみられない。子どもが、行為の目標を自覚するためには、視覚的ツールや医療物品を用いた具体的な説明は有効ではある。しかし、目標が自覚できたとしても、気持ちの調整ができなければ、彼らの検査･処置への拒否は強くなる。

また、検査・処置を受ける幼児後期の子どもに関わる看護師も、子どもの視点に立った認識を持ちながらも、子どもの負の感情表出への対応に不安や迷いを伴い、医療処置をスムーズに終わらせることを優先する医療者の都合に沿った認識へと揺れ傾く傾向がある（鈴木, 2000）。つまり、看護者のプレパレーションの必要性への認識や関わりが、幼児後期の子どもの思考の発達を前提にしたものではないために、子どもの反応の意味を十分に理解できず、子どもの思いを受けとめきれず、結局、無理矢理に医療処置を進めてしまう場合も多くある。

そこで、検査・処置を受ける幼児後期の子どもが調整能力を発揮できる支援プログラム開発をする必要がある。それにより、子ども自らがこの時期に芽生える自己調整機能を働かせ、“嫌だけれども頑張る”と納得して検査・処置に向かい頑張ろうとする力を発揮することができ、自己への有能感に繋がると考えられる。さらに、看護師にとっても、子どもの反応を捉えたより効果的な検査や処置を進めていくことができ、子どもとの信頼関係の形成とケアへの自信に繋がる。

これまでの研究結果から、検査・処置を受ける幼児後期の子どもの不安や恐れ・拒否の感情の表現や程度は、医療者や重要な他者の説明や対処の違いにより変化することが明らかになっている。そして、検査・処置を受ける幼児後期の子どもがよい体験を得るためは、見通しを立てられる説明、代弁者・共有者としての重要な他者の存在、検査・処置終了後の重要な他者や医療者からの頑張りに対する適切な評価を得ることが必要であった。また、子どもの不安や恐れに寄り添いながら支えようとしている母親の存在は、思考・調整能力の発達により我慢しながらもことばで十分に思いを表現しきれない幼児後期の子どもの安心の大きな支えになっていた。そして、それらは、医療者の幼児後期の子どもの調整能力への理解とそれをふまえた関わりがあってはじめて可能になるものだった。このような先行研究から、子どもとその重要他者を支えるためには、医療の場の中で、子どもが調整機能を働かせられるための支援プログラムの開発が求められる。そして、検査・処置時における幼児後期の子どもの自己調整機能の明確化、支援プログラムに対するエビデンスを示し、提言していく必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は、検査・処置を受ける幼児後期の子どもの調整能力発揮への支援プログラムを開発し、その効果を明らかにすることにある。

幼児後期に芽ばえる調整能力を発揮できる検査・処置時の支援プログラムを開発し実践への位置づけをすることにより、子ども自らが検査・処置に向かい頑張ろうとする力を発揮することができ、自己への有能感に繋がると考えられる。

さらに、看護師にとっても、子どもの発達に即した支援プログラムの実施により、子どもの反応を捉えたより効果的な検査や処置を進めていくことができ、子どもとの信頼関係の形成とケアへの自信に繋がることを目指している。

３．研究の方法

平成 23 年度調査
平成 24 年度調査
平成 25・26 年度調査

４．研究成果

【平成 23 年度調査：「幼児の自己調整機能」の文献検討、看護師の認識に関する調査】

調査目的は、検査・処置を受ける幼児後期の子どもの自己調整能力を支援することへの看護師の認識を明らかにすることである。

1）文献検討

幼児後期の子どもの自己調整機能を明らかにするために､国内外文献 28 件を検討した。その結果、幼児の自己調整機能は、欲求や意志が他者（社会）のそれらと拮抗・葛藤した時に生じ、自発的・自覚的な目標や意志により自己の行動、感情、心身の状態などを監視し、適切な方向に導くものだった。

2）看護師の認識に関する調査

(1)調査方法

検査・処置を受ける幼児後期の子どもの自己調整能力への支援に関する看護師の認識を明らかにするために、検査・処置の中でも医療処置としてよく行われ、子どもにとっても痛みを伴いストレスが高いと考えられる点滴・採血に焦点を当てて調査した。

看護支援プログラムの試案作成に向けて、看護師が捉える点滴・採血を受ける幼児後期の子どもの自己調整機能、および、看護師が捉える自己調整機能の発揮に向けた看護師の関わりを明らかにするために、小児看護に 3 年以上従事する看護師 13 名を研究参加者とし半構成的面接を行い、質的記述的研究方法を用いて分析した。

(2)倫理的配慮

所属機関および研究協力施設長の承諾を得た。研究参加者には研究の目的と方法、データの匿名性・守秘性の厳守、研究参加の自由意志の尊重、結果の公表について文書と口頭で説明し同意書に署名を得た。

(3)結果および考察

看護師は、点滴・採血を受ける幼児後期の子どもの自己調整機能として、「子どもが気持ちを主張している姿」、「葛藤しながらも気持ちを納めようとしている姿」、「頑張ろうと処置に向かう姿」、「他者からの評価を受けて頑張れた自己を認識している姿」を捉えていた。

また、看護師は、点滴・採血を受ける幼児後期の子どもの自己調整機能の発揮に繋がった関わりとして、「子どもの自発性の発揮に向けての関わり」、「子どもを尊重し足場を提供する関わり」、「共感的フィードバックへの関わり」を捉えていた。

そして、看護師は、このような点滴・採血を受け入れようと努力し気持ちが揺れている幼児後期の子どもの調整機能を、経験知から捉えていたことが明らかになった。

また、看護師は、個々の経験からの感覚的な判断をケアに繋げており、自己調整機能の発達に裏付けされた子どもの姿や関わりとして認識していなかった。

このことから、明らかになった自己調整機能を発揮している子どもの姿や自己調整機能の発揮に向けた看護師の関わりを自覚的に認識し子どもに関わる必要性が示唆された。

【平成 24 年度調査：点滴・採血を受ける幼児後期の子どもの調整能力発揮への支援プログラムの試案作成】

点滴・採血を受ける幼児後期の子どもの調整能力発揮への支援プログラムの試案を作成し検討すること、その効果を測定する指標を検討することを目的とする。

1）点滴・採血を受ける幼児後期の子どもの調整能力発揮への支援プログラム試案の作成

『「幼児の自己調整機能」の概念分析』および『看護師が捉える「幼児後期の子どもの自己調整機能の発揮」への関わり』の調査結果を基に、「点滴・採血を受ける幼児後期の子どもの自己調整機能の発揮」に向けた看護介入プログラム試案を作成した。

プログラム内容の作成では、平成 23 年度の調査で明らかになった、文献検討、看護師が捉える子どもの自己調整機能、子どもの自己調整機能の発揮への関わりを基にして、介入プログラムの内容を検討した。

そして、介入時期を処置前から処置が終わるまでの子どもが感じるであろう処置の段階に分けて設定した。また、処置前から処置後まで常時必要とするかかわりを、基盤となる関わりの項目として設定した。その上で、具体的な支援内容を抽出しプログラムの手引書を作成した。

さらに、理解しやすい表現に修正し、「子どもの拠り所として支え、安心や信頼感を得られるようにする」などのプログラム骨子を作成した。

また、プログラム説明のためのツールとして、看護師への説明用資料の詳細版、要点のみを記したコンパクト版、さらには子どもへの説明時に使用できる資料を作成した。作成に当っては、研究者間で内容や表現について検討した。

プログラム実施方法は、「幼児後期の子どもの自己調整機能の発揮」に向けた関わりを実践学習できるプログラムとした。

プログラムの効果は、プログラム実施による看護師の認識の変化から判断することとし面接調査内容を作成した。また、子どもの本来持つ自己調整機能を把握するための指標として、既存の測定用具の使用について検討した。

【平成 25・26 年度調査：支援プログラムの実践とその検討】

「点滴・採血を受ける幼児後期の子どもの調整能力発揮への支援プログラム」の試案を実践し、看護師および子どもの変化を捉えて実践の分析を試みることを目的とする。

1）調査方法

研究参加者は、研究の趣旨を理解し協力の同意が得られた医療機関の小児病棟・小児外来において、点滴・採血場面に関わっている小児看護経験年数が 3 年以上の看護師である。また、看護師が介助をする幼児後期にある子どもとその保護者である。

看護師に対する点滴･採血場面の参加観察、

観察後の面接調査、保護者に対する子どもの基礎情報に関する調査を行い、得られたデーターを質的記述的研究方法を用いて分析した。

2）倫理的配慮

所属機関および研究協力施設の研究倫理委員会の承諾を得て実施した。研究参加者には、研究目的と方法、データの匿名性・守秘性の厳守、研究参加の自由意思尊重、結果の公表について文書と口頭で説明し同意書に署名を得て行った。

３）結果および考察

研究参加の同意があり協力が得られた看護師は 12 名である。そのうち、複数回の参加観察ができたのは８名であり、小児看護経験年数は平均 6.6 年であった。

〔普段のケア〕

普段の実践では、看護師は「本人もだいたいわかってたので割りとやりやすい例だったんですけれども」というように子どもの理解に対して表面的に捉えていたり、「きっと嫌なことは嫌やから、多分、注射は嫌」というように「いや」と言う子どもを表面的に捉えていた。また、「緑の服(点滴衣)は嫌と。…じゃあ少しでも何か違った、楽しみがあるといいなと思って、（点滴衣に描く絵を)アンパンマンにしたんです。」というように子どもの思いに寄り添おうとしたり、言葉で説明し子どもの理解を得ようとしていた。

しかし、看護師は、子どもから表出される恐れにとらわれたり、子どもに対して意図なく受容的に関わっていたり、医療者主導に流された処置行動などを行っていた。

〔プログラム研修後初期〕

プログラム研修初期の実践では、プログラム内容を失念して普段どおりの実践に終わったり、プログラム実施への戸惑いや、マニュアル的にプログラム実施している看護師がいる一方、「子どものペースにできるだけ合わせようっていうふうに変えたところですかね」と子どものペースに合わせる努力などをしながら、「今回は駆血帯も選び、本人に『どれ？』みたいな感じで選択する幅を増やしたこと」というようにプログラム実践への踏み出しができた看護師もいた。そして、「少しずつ、嫌々って言いながらも、ちょっとづつ何かこれしようかってゆうふうに問いかけると割と行える」というように具体的で間を持った関わりの大切さに気づいたり、嫌だけれども処置に向かおうとする子どもの姿の捉えができた看護師もいた。また、このような実践から、子どもの頑張っている姿を支える必要性の気づきなどが生じていた。

〔プログラム研修複数回〕

プログラム研修複数回の実践では、プログラム内容の実践レベルは看護師それぞれに異なってはいたが、全ての看護師がプログラム内容を意識し実践していた。そして、看護師は、「少しずつ少しずつ自分のできる範囲っていうのを広げていくっていうんかな、それを何っていうんか看護師の言葉かけとかでちょっとずつ広がりを見せることができるんだな」と感じていたり、「こっちの言いたいこともわかっているし、嫌だけど頑張ろうっていう気持ちがちゃんと持っているんだなってゆうふうに思い」という「嫌だという気持ちを折り込みながら頑張る」子どもの姿を見出し、「かなり個人差もあって 6 歳なりの成長の仕方って違うんだなーって思ったかな」というようなそれぞれの子どもの処置に向かおうとしている様子に気がつくようになっていた。また、試行錯誤しながらも、「もう一回ちゃんと説明することでわかってくれる子じゃないかなーってゆうふうに思い、ちょっと時間空けてもちょっと心落ち着くまで、そのちょっとした時間でもこの子落ち着くことが出来るんじゃないかなーってゆうふうに思い、そうゆうふうに(一旦駆血帯を外すことを）行った」というように信頼を基盤にして子どもと応答的に関わったり、後ろ盾としての母親と協同して子どもの安心の拠り所としての取り組みなどを行っていた看護師もいた。そして、「今度は気持ちをできるだけこっちを持ってって、自分の中でちゃんと確認してやろうって思ったのが、自分の中で段階を踏んでって」というように子どもへのケアを発展させ、さらに、このようななかで、子どもの頑張る力を支えている充実感を得たり、子どもに寄り添う自己を知覚するような言動がみられた。その一方で、子どもが頑張っていることを支えることが難しいと感じている看護師もいた。

以上の結果から、プログラムの複数回の実施により、看護師の観察は、幼児後期の子どもへの漠然とした表面的な観察から、点滴や採血に対する“ 嫌だけれども頑張ろうとする ”自己調整機能を読み取ろうとする観察へと観察力が向上していくことが明らかになった。

また、看護師は子どもに寄り添おうとする気持ちを持ってはいても、プログラム前の普段のケアでは、多くの看護師が医療者ペースで処置を進めていた。しかし、プログラム研修後の看護師はより子どもの不安の状況に寄り添い、試行錯誤しながらも子どもペースでの応答的ケアへと変化し、幼児後期の自己調整機能の発揮に向けた実践へと変化していくことが明らかになった。そして、子どもへの具体的で間を持った関わりや、子どもを安心させる関わりの大切さに気づき、幼児後期の子どもの自己調整機能の発揮に向けた関わりの必要性の認識が高まっていくことが明らかになった。

さらには、プログラムを意識した実践により、看護師は、幼児後期の自己調整機能の発揮に向けて子どもを支えようとしていくなかで、より「この子」がわかることや「この子」と共にケアを探求しようとする姿勢へとつながっていくことが示唆された。

このような結果から、幼児後期の子どもの

自己調整機能の発揮に向けた看護師の実践の定着のためには、プログラム内容を意識しながら実践を重ねていくことが必要であり、さらには、看護師が自己の実践を省察する重要性が明らかになった。その一方で、多重業務を抱えている臨床現場のなかで、医師や他の看護師と協働しながら実践していくことの難しさも明らかになり、多忙ななかでもいかに進めていくかということも課題として示された。

今後は、プログラムの複数回実施に至らなかった研究参加者に対して継続してデータ収集を行うとともに、効果の度合いを含めた分析に取り組んでいく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

1）吉田美幸、楢木野裕美（2012）．点滴・採血を受ける幼児後期の子どもの自己調整機能，日本小児看護学会誌，21（2），1-8．査読有り

2）吉田美幸（2015）．点滴・採血を受ける幼児後期の子どもの自己調整機能発揮に向けた関わりに対する看護師の認識，日本小児看護学会誌，24（2），1-9．査読有り

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　美幸（Yoshida Miyuki）
福井医療短期大学・看護学科・教授
研究者番号：50465845

(2)研究分担者

楢木野　裕美（Naragino Hiromi）
大阪府立大学・看護学部・教授
研究者番号：90285320

鈴木　敦子（Suzuki　Atsuko）
四日市看護医療大学・看護学部・教授
研究者番号：50196789